

分布：全国

## チカラシバ (イネ科)

学名: *Pennisetum alopecuroides*

カ芝 別名：ブラシ草、ミチシバ、タヌキノシリオ、カグマ、コマツナギ、コッテイコカシ

### 主な生育場所

道ばた、野原、堤防や土手の法面、田畑の畦畔などに生える。日当たりのよい草地を好む。乾いた環境によく見られるが、いったん根を張ってしまうと多少の冠水を受けるような場所でも生育する。

### 特徴

高さ30~80cmとなる多年生。茎は直立し、叢生して大株となる。葉はほとんどが根生葉で暗緑色、長さ30~70cm、幅5~8mmと細長い。夏から秋にかけて花茎を直立し、先に黒紫色で長さ10~20cm、幅2cmほどの円柱形の花序をつける。果実の先端には2~3mmほどのノギがあり動物などにくっつきやすい。



道ばたによく見られる



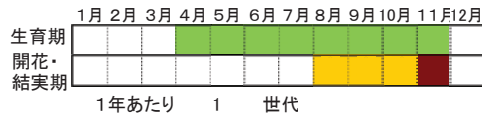
ブラシのような穂

名前の由来：根がしっかりと土の中に張り、茎や葉も強く干切れにくいので、手で引っ張ってもなかなか引き抜けないことから、力強い「シバ」との意味でカ芝(ちからしば)。

### <農業との関係>

頻繁に耕耘が繰り返されるような畑地や水田内には侵入しないが、果樹園や牧草地ではときに群落化する。放牧牛は出穂後のチカラシバを採食せず、また果実のノギが牛の眼や鼻を痛めてしまい問題となる。放牧地のチカラシバは放牧牛の密度を高め、春から秋まで連続放牧することで防除できる(<https://www.naro.affrc.go.jp/project/results/laboratory/nilgs/2001/nilgs01-27.html>)。

### <生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 秋の道ばたで円柱形の花序となるのは他にエノコログサの仲間があるが、エノコログサの仲間は叢生せず、また花序の幅は狭く、垂れ下がるものが多い。チカラシバの近縁の外来種ネピアグラスは大型で2mにも達し、穂は黄色い。

### <一言うちく>

チカラシバの近縁種には、主にアフリカや東アジアの乾燥地帯で栽培されるトウジンビエがあります。チカラシバよりも密に果実をつけたガマの穂に似た穂をつけ、実は粉にされ、北アフリカ料理のクスクスの材料にも利用されています。ただ、高温多湿の日本では栽培は難しいようです。

### <人との関わり合い>

食用や薬草として利用された記録はないが、まるで試験管ブラシのような穂はよく目立ち、子どもたちの野辺の遊び道具として使われてきた。例えば、簡単には引きちぎりにくいことから、あぜ道の両側に生えるチカラシバの葉を結んで、足をひっかけさせる罫としたり、エノコログサの穂のように穂を握り斜上するノギを利用して毛虫のように動かしたりして遊ぶ。また、いわゆる「ひっつきむし」のひとつで、セーターによくノギが絡まりなかなか取れなかった記憶のある方も多いのではないだろうか。

### <俳句や短歌への登場>

【季語：秋？】 立ちかわり古き都となりぬれば道の芝草長く生ひにけり (万葉集 田邊福麿)  
花ぞ見る道の芝草ふみわけて好野の宮の春のあけぼの (藤原 季能)  
ふるさとを恋ふる涙やひとりゆくともなき山の道芝の梅雨 (慈円)  
道芝や露ふみわけて見しほどに逢ふ夜の袖もぬれにけるかな (大江 匡房)

分布：全国

## コメツツメクサ (マメ科)

学名: *Trifolium dubium*

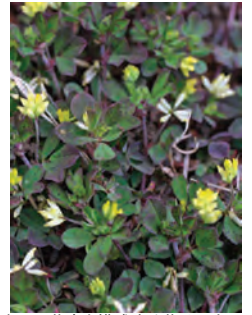
米粒詰め草 別名：キバナツメクサ、コゴメツメクサ

### 主な生育場所

道ばたや空き地、荒れ地、土手、芝地、田畑の畦などにも見られる。往來の激しい道沿いに多く、あまり人が通らないような場所には少ない。日当たりが良く、やや乾いた場所を好むが、乾燥にも強い。

### 特徴

ヨーロッパから西アジア原産の一年草ときに越年草。高さ約30cmで、茎は根元からよく分枝し、細く暗褐色。全体わずかに毛がある。葉は互生し3小葉からなり、小葉は長さ0.5~1cm、幅5~8mmの倒卵形で上部には鋸歯。托葉は2裂。葉腋から花柄を伸ばし、約3mmの黄色の蝶形花を5~20ほど球形につける。花序の直径は約7mm。



球形の花序を構成する花は小さい



葉は長さ1cmほどの3小葉



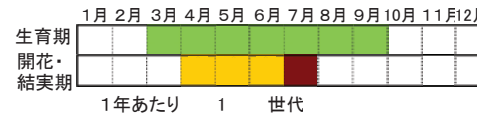
花後も花弁は白く枯れたまま、垂れ下がって残る

名前の由来：シロツメクサと同様に球形の花序を穂包材として利用してきたので詰め草。小さな花がまるで米粒のようであることから米粒詰め草。また、花色が黄であることから別名は黄花詰草。

### <農業との関係>

道ばた等ではよく見かけるが、畑内に入り込むことは少ない。ときに芝生地の雑草となることがあるが、問題となることはあまりない。田畑の畦畔では、刈り取りに強いので、グラントカバープランツとして利用することができる。また、放牧地や採草地に生えることは少ないが、シバ草地では早春の重要な飼料となるとともに、シバの生産量も高めることが知られている。

### <生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> クスダマツメクサ(外来種)は同じ黄花の集合花をつけるが、花はやや大きく、花序も2cm前後と大振りとなる。コメツツウマゴヤシ(外来種)の球形花序も約2cmとコメツツメクサよりやや大きく、花後に花弁は残らず果実がよく目立つ。

### <一言うちく>

日本には明治の終わりごろには東京など一部の都市に渡来したとされていますが、戦後、急速に分布が全国に拡大しました。その背景には、連合軍の進駐に伴う、物資や人の移動があるとされています。そのため、今でも幹線道路や往來の多い道沿いなどで多く見かけられるのです。

### <人との関わり合い>

シロツメクサやクスダマツメクサなどのツメクサの仲間よりも花は小さく、観賞価値も低いので、これまではあまり注目されてこなかった草花の一つである。ただ、生産量は少ないが、飼料価値はあるようで、草地に生えたと利用することができる。シロツメクサの葉などは食べることができるが、コメツツメクサの葉は小さく、食用の記録はみつからない。また、民間薬や漢方利用も含めて、薬用に利用された記録も見当たらない。

### <俳句や短歌への登場>

【季語：春？】 戦後に広がった植物でもあり、花も植物体も小さいことから、詩歌に取り上げられることはないようだ。しかし、小さな黄花が集合した球状花はよくみるとそれなりに可愛らしく、花後の乾燥した花弁が残る風情も、もの哀しさを誘う。

分布：本州・四国・九州（沖縄以外）

### サンショウモ（サンショウモ科）

学名：Salvinia natans

山椒藻 別名：モ、ウキグサ、サルビニアナタンス

#### 主な生育場所

水田やハス田、ため池や湖沼、湿地に生える。流れのない、もしくは緩やかな水路にも見られることがある。河川下流部の氾濫源由来の水田に多い。大発生するとため池の水面を覆ってしまうことがある。

#### 特徴

浮遊葉が多数群生する根のない浮遊性の水生シダ植物。茎の両側に葉を3枚輪生し、2枚は対生する浮葉で長さ1-1.5cm、幅0.4-1cmの楕円形。葉の表面には多数の突起が平行して並び、突起上には毛を密生。残り1枚は水中葉で細裂し根のように水中に垂れる。秋から初冬にかけ水中葉の基部に大孢子囊と小孢子囊をつける。

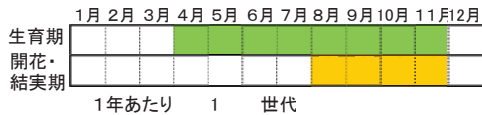


名前の由来：対生する浮葉が連なって水面に浮かんでいる様子が、香辛料に利用され山野に生育する山椒（さんしょう）の羽状複葉に似ていることから、水中に生える山椒の意で、山椒藻。

#### <農業との関係>

かつてはごく普通の水田雑草として、駆除の対象となるほど各地で繁茂していたが、除草剤に対する感受性が高く、また胞子は冬季の乾燥に弱いことから、除草剤の普及と乾田化による湿田の減少等により、各地で減少したり、生育環境が消失して、現在では絶滅危惧種として扱われている地域が増えている。また、ウキグサ類と混生するため、わずかに残っても気づかれないことも多い。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



稲の株元に生えるサンショウモ

<類似種> 熱帯アメリカ原産のオオサンショウモは、全体が白っぽく見え、サンショウモよりも一回り大きく、葉が二つ折りに重なっていることが多い。なお、オオサンショウモは繁茂すると在来種との競合が懸念され、要注意外来種に指定されている。

#### <一言うち>

サンショウモなど水生のシダ類の仲間の多くは、水田雑草としてかつては全国の水田で見ることができました。しかし、いずれも除草剤に弱いため、現在では、ほとんどの種類が絶滅危惧種に指定されています。地味な水生シダは、このまま未知の水田から姿を消してしまうのでしょうか。



水中葉の基部にみられる孢子囊

#### <人との関わり合い>

山椒に似た草姿の水草は他にあまり例がなく、また水生のシダ植物としても特殊であるため、サルビニア ナタンス として、観賞用の水草として栽培されることがある（※外来種のオオサンショウモもサルビニア ナタンス として販売されることがある）。また、かつては理科教材としても利用されていたようだ。

山椒藻の名がついているが、食用としての記録はなく、薬効も報告されていない。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語：不明】

かつては各地の水田に見られ、見慣れた植物と思われるが、ウキグサ類などと混生するため、あまり意識されてこなかったようだ。二枚の対生する山椒のような葉が水面に浮かぶ様子は風情を誘うが、野外で見かけることがすっかり少なくなってしまった現在では、今後も詩歌等に登場することは難しいか。

分布：北海道を除く全国

### クログワイ（カヤツリグサ科）

学名：Eleocharis kuroguwai

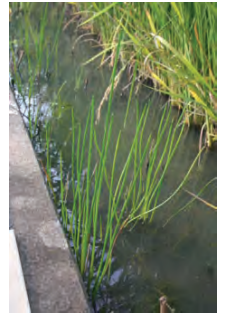
黒慈姑、烏芋 別名：エグ、タイモ、ピリピリグサ、クワイズル、イゴ、ゴヤ、ギワ、クワイ、クワエ

#### 主な生育場所

水田や休耕田、水路、ため池、湿地、湖沼などで生育する。水田では冬期に乾きにくい湿田や半湿田で多く見られる。塊茎の寿命が長いので、転作後の畑にも見られることがある。

#### 特徴

主に塊茎で繁殖する高さ30~90cmの多年生水草。最初、直立する細い針金状の茎が、径3~4mmとなり叢生し大株となる。葉のない茎は中空で多数の横隔膜で仕切られる。茎先に黄褐色で円柱状の花穂をつける。地下茎は地表下を水平に伸び、次々と子株を形成。秋に各株の基部から下方に地下茎を伸ばし先に塊茎をつくる。



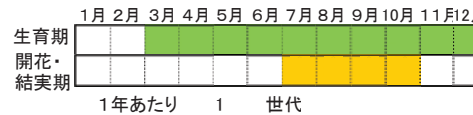
畦際に生えるクログワイ

名前の由来：クワイ（慈姑）とは芋状の塊茎を食用とするオモダカの栽培品種のことで（2011年8月号で紹介）、クワイの塊茎によく似て色の黒い塊茎を形成することからクログワイ（黒慈姑）。

#### <農業との関係>

水田で多発生すると、イネの分けつを阻害し収量が半減することもある。またイネを倒伏させたり、絡まって収穫効率を低下させてしまう。除草剤も効きにくい。なかなか駆除しにくい難除雑草のひとつである。塊茎は冬期の乾燥に弱いため、多発生した場合、収穫後の秋耕や土壌深く形成された塊茎を表層に露出させる反転耕など、塊茎の密度を下げる努力を続けることが大切である。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



伸ばした地下茎の先に塊茎(左上)をつける

<類似種> 同じような塊茎をつくるオモダカの葉はヤジリ型で塊茎も白っぽい。イヌホタルイやイグサなども葉のない茎が叢生するが、クログワイの茎内には所々にしきりの壁（横隔膜）があり、茎をつぶすとぶちぶちと音が出ることで見分けられる。

#### <一言うち>

もともと湿地や湖沼の植物だったクログワイが水田にも定着するようになると、イネ栽培に伴う耕うんや水管理のスケジュールに適応して、塊茎を形成する時期などが変化してきました。このように生育環境にあわせて生育パターンが変わっていくことを「生態型の分化」と呼んでいます。



花穂

#### <人との関わり合い>

古く万葉集の時代から塊茎を野菜として利用しており、江戸時代には乾荒作物として水田の脇などに栽培されてきた地域もあった。また、近縁種で主に西日本で見られるイヌクログワイの栽培種（シナクログワイ）の塊茎は直径2~3.5cmと大きく、中華料理の食材として使われる。ただえぐみが強い（別名の由来）ため、下茹でしアクを除いてから油で炒めたり煮物にする。また、塊茎の皮にはフラボノイドが含まれ、塊茎を煎じたものは目の腫れや痛みなどに効用があるとされる。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語：初春】

君がため、山田の沢にえぐ採むと、雪消の水に、裳の握ぬれぬ（万葉集 詠み人知らず）※えぐ=クログワイ  
あしびきの、山沢えぐを採みに行かむ、日だにも逢はむ、母は責むとも（万葉集 詠み人知らず）  
うば玉の烏芋のしめ花袖哉（三浦 橋良） 時雨のや辛抱つよき烏芋掘（鶴田 卓地）

分布: 全国

### アキノノゲシ (キク科)

ラクツカ インディカ  
学名: *Lactuca indica*

秋の野芥子 別名: 乳草(ちぢぐさ)、ウマゴヤシ、ウサギグサ、ホソバアキノノゲシ

#### 主な生育場所

野原や道ばた、田畑の畦畔、畑、樹園地などに生える。日当たりがよくやや乾いた場所を好む。刈取りにも強く、草刈りがよくなされ、他の大型植物に覆われていない肥沃な場所に多く見られる。

#### 特徴

越年草ときに数年生存する。全体無毛で茎は直立し高さ0.5~2mに達する。切り口から白い乳液が出る。葉は互生で柔らかく茎を抱き、普通、下部の葉は羽状に裂ける。茎の上部に円錐状に直径約2cmで淡黄色まれに白色の舌状花だけからなる頭花を多数つける。黒色の種子は長さ約5mmで長い冠毛をつけ、風散布される。



名前の由来: 葉の形や花の形が主に春に咲くノゲシ(ハルノゲシ)に似ていて、秋に花が咲き出すので、秋のノゲシ。また、別名の乳草は葉や茎を切ると、白い乳液が出ることから。

#### <農業との関係>

南アジア、東南アジア、東北アジアにかけて広く分布し、稲作の伝播とともに附随して日本へ渡って来た史前帰化植物の一つとされる。草刈り頻度の低い樹園地や、畑地で除草しにくい株間に生えると大株となり、密生すると雑草害を引き起こす。しかし、耕起に弱く、また草刈りによって草高が抑えられるため、耕起や草刈り頻度が高いと害草化することは少ない。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



1年あたり 越年1 世代



直径2cmほどの淡い黄色(クリーム色)の頭花

<類似種> ノゲシは春先から花が咲き始め、花色は黄色で葉の基部は三角形。秋に咲くヤマニガナやヤクシソウは山地に生え、アキノノゲシより舌状花数が少ない。また、コウゾリナには全体に剛毛が生え、葉は羽状に裂けない。

#### <一言うんちく>

アキノノゲシ属 (*Lactuca*) には、野菜のレタスも含まれます。レタスもアキノノゲシと同様に西アジアを原産とし、レタスのヘタを切ると同じように乳液が出ます。また、レタスの中には苦み強いものがありますが、アキノノゲシの茎をかじってみると、やはり苦いことがわかります。



下部の葉は羽状に大きく裂ける

#### <人との関わり合い>

アキノノゲシの変種で葉の切れ込みがなく前縁の細い葉となるリュウゼツサイ(竜舌菜)は食用や飼料となり、中国や台湾で利用されている。日本にも昭和初期に鶏の餌として導入されたが、今は栽培はほとんど見かけずに、各地で野生化している。アキノノゲシも食用となり、苦みの少ない春先の若芽はサラダになる。6月以降は苦みが強くなるため、塩茹でして水に晒し、お浸しや油炒めなどにする。また、民間療法では、胸やけや皮膚病の薬と利用されていた記録がある。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語: 秋?】

農村に一般的な草花で、秋に背高くたくさんの花を付ける様子には風情があり、また大きく羽状に裂ける葉も目立ち、それなりに目にとまる花だと思っただが、名前が6文字と中途半端であることもあってか、俳句や短歌に登場する例は見かけず、季語の設定もないようである。

分布: 全国

### ヘクソカズラ (アカネ科)

バエデリア フォエタイダ  
学名: *Paederia foetida*

屁糞蔓 別名: ヤイトバナ(灸花)、サオトメバナ(早乙女花)、サオトメカズラ(早乙女葛)

#### 主な生育場所

日当たりの良い路傍や林縁、荒地、草地、土手などに生える。休耕地や田畑の畦、樹園地にも見られる。地面も這うが、つる性植物なので、他の植物やフェンスなどに絡まって長く伸びていく。

#### 特徴

つる性の多年草。茎が左巻きで他の植物などに絡まる。葉は対生し長さ4~10cm、幅1~7cmで全縁、先はとがる。葉の大きさ、毛の有無などは変異が多い。葉柄基部には鱗片がある。葉腋から短い花序をだし、灰白色の花は長さ約1cmの釣鐘状、先は浅く5裂し内側は紅紫色となる。径約5mmの球形の果実には種子が2個入る。



名前の由来: 葉や茎、実などにまるで「おなら」や「糞尿」のような悪臭があるつる草ということで屁糞蔓。また、白い花の中心が赤紫となり、灸をすえた跡のように見えることから灸(やいと)花。

#### <農業との関係>

田畑の周辺にも見られ、水田内に侵入することはないが、ときに畑地や樹園地で雑草化する。耕地に発生するとつる性のため、作物に絡んで伸長し、除去が困難となる。また、畦畔の草刈り時にも機械に絡まって作業効率を悪化させることがある。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



1年あたり 1 世代



先端に萼片が残る直径約5mmの果実

<類似種> 人里周辺にみられる対生の葉をつける単葉で全縁のつる植物には、ヘクソカズラのほかに、ガガイモやヤマノイモ、園芸種のツルニチニチソウなどがあるが、葉を千切って特有の悪臭を確かめればまず間違うことはない。

#### <一言うんちく>

学名 *Paederia* も「悪臭」を語源とし、英名でも *Skunkvine* (スカンクの臭いの草) と呼ばれる悪臭が印象的ですが、白地に中央が深紅に染まる花を早乙女がかぶる田植え茎に見えて早乙女花との異名もあります。屁糞蔓より早乙女と呼んであげればだいぶこの草の印象は変わるとおもうのですが。



他の植物などに巻き付いて伸長

#### <人との関わり合い>

人里に生え、その強烈な悪臭から昔からよく知られてきた草の一つである。「屁糞蔓も花盛り」(鬼も十八、番茶も出花、と同様の意)ということわざもあり、悪臭だけでなく盛夏に咲く花の美しさにも気づいていたのだろう。その悪臭ゆえ、食用には適さないが、水洗した生の果実をつぶしたものはもやしや、あかぎれなどに効用があり、化粧水にも利用できる。また、葉の汁は毒虫に刺されたときに塗布すると毒消しの効果があるとされる。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語: 夏】

名をへくそかずらとぞいふ花盛り (高浜虚子) 表札にへくそかずらの来て咲ける (鉛山 寛) かはらふぢに這いおぼれる屎葛絶ゆることなく宮仕えせむ (万葉集・高宮王) 秋されば へくそかずらの 花にさへうすくれぬいの いろさしにけり (尾山 篤二郎) くだらぬものおもひをばやめにせむ、なにか匂ふは屁糞蔓か (若山牧水)

分布：全国

### ヒガンバナ（ヒガンバナ科）

学名：*Lycoris radiata* リコリス ラディアータ

彼岸花 別名：曼珠沙華(マンジュシャゲ)、狐花、はみずはなみず(葉不見花不見)など

#### 主な生育場所

田畑の畦や路傍、土手、墓地など。稲作とともに有用植物として中国大陸から渡来した植物とされ、人里やその付近でしか見られない。あまり日がささない被陰環境にも強く、湿った場所を好む。

#### 特徴

鱗茎で増える多年生。9月中旬に高さ30~50cmほどに花茎を伸ばし、鮮紅色の花を5~7個輪生させる。6枚の鮮紅色の花弁は長さ約4cm幅5mmで、強くそり返り、雄しべと雌しべは長く突き出る。晩秋に幅6~8mm長さ30~50cmでツヤのある線形葉を地面から放射状に伸ばすが、翌春には枯れる。夏は地中の鱗茎のみで過ごす。

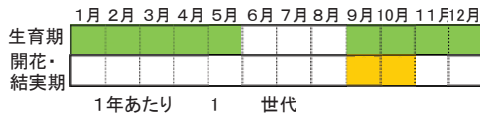


名前の由来：秋の彼岸前後に開花することから彼岸花。また梵語で「赤い花」をmanjusakaと呼び、「曼珠沙華」とあてた。「はみずはなみず」とは花と葉が同時に存在することがないことから。

#### <農業との関係>

鱗茎には強い毒性もあるが大量のデンプンも含み、水に晒せば毒性分であるアルカロイドが除去されるため、古来から飢饉時の救荒作物として里地やアゼに植えられてきた。また、毒成分のため、ネズミやモグラなどが寄りつかないとされたことも、積極的に田畑のアゼなどに植え付けられてきた理由とされている。他の植物の発芽や成長を抑えることも知られ、アゼの雑草抑制にも使われる。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



棚田のアゼに植えられたヒガンバナ

<類似種> キツノカミソリは8月のお盆頃に花茎を伸ばし、黄赤色の花をつけ、花弁は反り返らず雄しべと雌しべは外に突き出ない。ショウキズイセンはヒガンバナと同時期に咲くが、花は一回り大きく色は黄色で花弁の縁は波打つ。

#### <一言うち>

毎年、秋のお彼岸頃に花茎を伸ばすヒガンバナ。その秘密は冬の寒さと夏の暑さにあります。ヒガンバナは冬季の低温に会わないと花芽分化せず、また25~30℃の高温によって花芽が成長します。花芽が充分成熟し、気温も下がると彼岸頃にちょうど花茎を伸ばすタイミングとなるのです。



アゼのヒガンバナ群落(葉期)

#### <人との関わり合い>

ヒガンバナは3倍体のため結実しにくく、全国に見られるヒガンバナはほとんど人の手を介して植え付けられたと考えられている。現在でも観賞用に植えられることが多い。有毒植物だが救荒作物や獣害よけなどに利用されるなど、古来から人間生活と関わりが深く、ヒガンバナの呼び名は全国に数百以上あるとされる。鱗茎は水に晒して毒成分のリコリンを除去しないと食用のデンプンをとることができないが、生の鱗茎はすり下ろして塗布すると、肩こりや乳腺炎、いんきん、打ち身などに効くとされる。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語：秋】 路の辺の寺師の花のいちしろく人皆知りぬわが恋妻を（柿本人麿歌集）  
曼珠沙華の花あかあかと咲くところ牛と人との影通りを（北原白秋）  
曼珠沙華あつげらかと道の端（夏目漱石） 曼珠沙華落暉(らくき)も薬(しべ)をひろげけり（中村 草田男）  
歩きつづける 彼岸花咲きつづける（種田山頭火） 父若く我いとけなく曼珠沙華（中村 汀女）

分布：北海道を除く全国

### ミズマツバ（ミソハギ科）

学名：*Rotala mexicana* ロタラ マキシカナ

水松葉 別名：とくになし

#### 主な生育場所

水田や休耕田、湿地に見られる。とくに草丈が低く、開放空間が確保されているような場所に多い。湛水下でも生育可能だが、日光が届かないような水深では見られない。

#### 特徴

高さ3~10cmほどの小型の一年草。全体柔らかく、茎は赤色を帯び、下部で枝分かれて地面をやや這うが、その先は立ち上がる。長さ5~10mm、幅1.5mmほどの柄のない葉を3枚、ときに4枚を輪生。花は葉脇に淡紅色の5枚の半球形のがくからなる花を単生。果実は0.8~1mmの球形で、成就すると3裂し、多数の微小種子を出す。

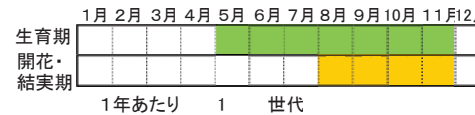


名前の由来：線形で柄のない葉が左右に広がる様子を松葉にたとえて、水中で生育することから、水松葉(ミズマツバ)。

#### <農業との関係>

水田という環境によく適応してきた水田雑草の一つ。本田の中だけに生育し、畦畔や水路にはほとんど見られない。関東地方以西では、かつて大発生するほ場も多く、水稻の強害雑草となっていた。最近では除草剤の普及などで各地で減少しているが、同属の水田雑草キカシグサと同様、スルホニルウレア(SU)系除草剤に対しての抵抗性型の出現が報告されている。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



葉腋に球形の果実をつける

<類似種> 水田に生育する同じ小型種のキカシグサの葉は対生し、やや厚みがあり、幅3~4mmと広く丸みを帯びる。関東以西に稀にみられるヒメキカシグサは高さ2~7mmとミズマツバより小型で、丸みのある葉は対生で幅1.5~4mm。

#### <一言うち>

各地で減少しているミズマツバ。しかし、目立たない小型の植物なので分布実態がよく分かっていない側面もあり、母念に田んぼの中を探すと各地で比較的に見つけやすい絶滅危惧植物でもあります。ミズマツバは稲刈り後の刈り田で、田んぼの宝もの探しにはうってつけの題材なのです。



葉は3~4枚輪生

#### <人との関わり合い>

各地の水田に普通に見られた水田雑草だが、目立たず食用や薬用などの記録もないことから、その存在を認識する農家は少ない。除草剤やほ場整備による乾田化の進行などによって、近年、各地の水田で激減し、絶滅危惧種に指定する地域も多く(環境省カテゴリー:絶滅危惧II類、レッドリスト指定:37都道府県)、やがて人知れず水田から消え去ってしまうかも知れない。ただ、最近では、海外の近縁種も含め、水槽のなかの鑑賞用の水草としてある程度支持されており、売買されることもある。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語：不明】  
水田に生える目立たない小さな植物で、とくに利用もされてこなかったことから、これまで詩歌等に取り上げられることはなかった。

分布: 全国

## コニシキソウ (トウダイグサ科)

カマエサイセ マクラータ  
学名: *Chamaesyce maculata*

小錦草 別名: アカクサ, チチクサ(乳草)

### 主な生育場所

畑地や芝地, 路傍, 裸地, 庭先などに普通に見られる。日当たりの良い環境に多い。また湿り気のある場所でも生育するが, 乾燥に非常に強く, 砂礫地など植物が生育しにくい環境にもみられる。

### 特徴

地面にへばりつくように生える北米原産の小型一年性。全体に白い伏毛が多く, 地上を這う茎は長さ20cmほどで切ると白い乳液を出す。葉は対生で長さ5~13mmの長楕円形, 上部に浅い鋸歯, 中央部に暗紫色の斑紋がある。6~11月ごろ葉腋に花弁のように見える4個の小さな付属体を持つ花をつける。果実には種子3つが入る。



名前の由来: 在来で同属のニシキソウ(高さ10~20cmほど)に似て小型の植物であることから, 牧野富太郎博士が日本に侵入後の1895年にコニシキソウ(小錦草)と名付けた。

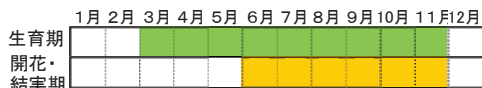
### <農業との関係>

夏作の畑にも生え, 秋遅くまで生育するが, 小型の植物であるため優占する場合は除いて, 雑草害はほとんど生じない。作物の根が入りにくいほどの固い土壌では優占してしまうことがある。地面にへばりつくようにして生えるので, 手取りでの除草は困難だが, 除草剤を運用するなど管理強度の高い水田畦畔では増えてしまう。湛水環境には見られないので, 水田雑草とはならない。



四方八方に茎を伸ばし地面を這う様子

### <生活史> 関東地方の例(目安)



1年あたり 1~2 世代

<類似種> 在来のニシキソウの葉は長さ7~15mmとやや大きく, コニシキソウよりも茎が赤みを帯び, 全体に毛が少なく葉に斑紋は出ない。北米原産の帰化植物オオニシキソウの葉は15~35mmとさらに大きく, 茎は立ち上がり高さ40cmほどとなる。

### <一言うち>

コニシキソウを観察するとアリがたかっていることがあります。アリは雄しべや雌しべのもとにある蜜腺から出る蜜が目当てで, 蜜を集める際に頭に付く花粉を運んでくれます。餌としてアリが運ぶ種子も生育地の分布拡大に貢献します。コニシキソウは巧みにアリを利用しているのです。



葉腋ごとに花をつける

### <人との関わり合い>

コニシキソウやニシキソウは背の高い草などに覆われてしまう場所は苦手で, 裸地のような環境を好み, 刈り込みに強く短期間で生育するため, 畑や畦畔, 芝生内などよく管理されている環境を好む雑草として馴染み深い。しかし, 小型の植物のため, これまで積極的に食用などに利用された事例は聞かない。また, 九州地方以南に見られる近縁のシマニシキソウについては皮膚炎や水虫, たむしなどの民間薬として利用された記録はあるが, コニシキソウの薬効については知られていない。

### <俳句や短歌への登場>

【季語: 不明】

ニシキソウやオオニシキソウも含めて, 小型で地味な植物のため, これまで詩歌に詠まれることはなかったようである。

分布: 全国

## タウコギ (キク科)

ビデンス トリバルチータ  
学名: *Bidens tripartita*

田五加木 別名: タコギ, クンショウ, カゼヒキグサ, カラスノハサミ, ダイサンソウ

### 主な生育場所

水田, 水田のアゼ, 休耕田, 水路など湿った場所に生える。水稻の栽培に伴って日本にもたらされた史前帰化植物の一つで, 水田やその周辺環境でよく見られ, 全くの自然湿地で見ることは少ない。

### 特徴

高さ20~150cmと直立する一年草。茎は全体無毛で葉は対生, 葉柄にやや翼があり, 深く3~5裂し粗い鋸歯がある。8~10月に上部の葉腋から花柄を伸ばし, 多数の黄色の筒状で構成され果実期に径25~35mmと大きくなる頭花をつける。総苞片は葉状で7~8枚, 長さ4cmほど。2本のとげがある瘦果は長さ7~11mm, 幅1.6~2.5mm。



名前の由来: 落葉低木のウゴギ(五加木)の葉に似て, 田に生えることから田五加木(タウコギ)。また放射状の総苞片に包まれた頭花が勲章に見えることからクンショウ。

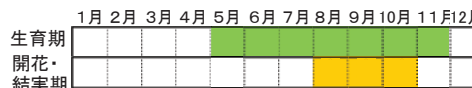
### <農業との関係>

特に東日本や北日本の水田でよく発生し, 養分や光を競合してイネの生育を不良にして減収を引き起こす。また, 大型の個体は茎も木化し, コンバインでの収穫時に障害となる。発芽に酸素を要求し, 湛水条件下では発芽しないため, 乾田や直播田, 畦畔沿いなど田面が露出した部分に多く, 湿田や深水管理の水田では少ない。しかし, 除草剤によって比較的簡単に防除可能である。



葉状の総苞片に囲まれた大柄な頭花

### <生活史> 関東地方の例(目安)



1年あたり 1 世代

<類似種> アメリカセンダングサ(メルマガ44号で紹介)も水田や水辺に生え, よく似るが, 葉は3~5枚の複葉で鋸歯は浅く, また頭花も小さく総苞片も細い。センダングサやコセンダングサはやや乾いた場所に見られ, 葉に毛があり瘦果は線形。

### <一言うち>

瘦果にはとげがあり, センダングサなどと並んで水田周辺での「ひっつき草」として昔から身近なこの草ですが, 西日本の各地では畦畔のコンクリート化による生育地の縮小や除草剤などの影響で減少傾向にあり, 兵庫県などでは絶滅危惧種に指定されるほど姿が少なくなってしまいました。



タウコギ(上)とタカサブロウ(下)

### <人との関わり合い>

アメリカセンダングサなどと同様に, 二本のとげによって, 衣服やペット等の体によく果実がくっつくため, 子どもたちは頭花を衣服等にくっつけて勲章のようにして遊ぶ。茎が固くなる前の若葉は茹でて食用になり, ゴマよごしなどにする。また, 中国では全草を気管支炎, 咽喉炎の薬に, 茎および根を下剤, 丹毒などの薬に用いる。

### <俳句や短歌への登場>

【季語: 秋】 タウコギや田五加木として登場する俳句や短歌の作例は見当たらないので, 花の終わった秋遅くにつける「草の実」を読んだ句の中から, タウコギの実を思い起こせるものを紹介する。

草の実も人にとびつく夜道かな (小林 一茶) 草の実の袖にとりつく別れかな (岩田 涼苑)  
草の実の招き寄せたる秋日かな (市場 基巳) 荒草の実もよく熟れて赤米田 (浅川 正)

分布: 全国

### ヤクシソウ (キク科)

クレビディアステルム デンクラチウム  
学名: *Crepidiastrum denticulatum*

別名: 乳草(ちちくさ), ウサギノチチ, ニガミグサ, ウマゴヤシ

#### 主な生育場所

日当たりの良くや乾いた山野, 林縁, 路傍, 崖地などに生える。石灰岩や蛇紋岩地帯など特殊な地質のところにも分布する。

#### 特徴

春に芽生えたあと, ロゼット葉で翌年まで過ごし, 2年目の夏以降に茎を立ち上げ開花する二年草。高さ30-120cm, 葉は互生し基部は丸く張り出し, 茎を抱く。茎や葉を折ると苦く白い乳液を出す。9-11月に舌状花のみの黄色い花をつける。花が終わるといったんうなだれ, 綿毛を付けた種子が熟すと再び上を向き, 種子を風でとばす。

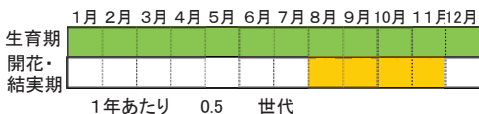


名前の由来: 茎を抱く倒卵形の葉の形が薬師如来の光背に似ているから薬師草。また, 切ると出る乳液は苦く, 薬となると考えられ, 衆生の疾病を治癒する薬師さまの名に拠ったとの説もある。

#### <農業との関係>

山間部の田畑の畦畔や法面に見られることがあるが, 畑の中に入ることはほとんどない。二年生植物であり, 2年以上耕起などの攪乱が生じない環境にしか生育できず, 耕地の雑草というより, 山野草である。従って, 耕地周辺あるいは野山が主な生育地であるが, ときに茅場や急傾斜地の焼き畑で見られることがある。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 花の形状だけみると, ニガナに似るが, ニガナは春から夏にかけて咲き, ヤクシソウのように茎先に固まって花をつけない。岡山県の石灰岩地帯には絶滅危惧種のナガバナヤクシソウが見られるが, ヤクシソウと異なり葉が茎を抱かない。

#### <一言うち>

薬師草という大変ありがたい名前がついているこの野草ですが, 酢酸ゲルマニシール, ベータ・システロールなどの薬用成分を含み, 実際に腫れ物などに効くことが知られています。また, 苦みがありますが, 食べることもでき, その名の通り, とてもありがたい野草のひとつなのです。

#### <人との関わり合い>

葉を茹でて, 煮浸して辛子マヨネーズからめて食べる。また, 苦みを活かして, 千切った葉をサラダなどに散らしても良い。民間薬としては, 開花期の頭花と茎を採取したものを天日で乾燥し, ゴマ油に漬けて腫れ物の患部に塗布して利用する。また, 馬が好んで食べることから, かつては晩秋の青物が少ない時期に飼料に混ぜて与えていたらしい。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語: 秋】  
摘みえたる野菊犬薬師草(いぬたてやくしぐさ)妹(いも)がみたまは家に待たむぞ (吉野 秀雄)  
薬師草草花も可愛ゆし蝶までも (牧野 富太郎)  
素朴なる黄色ひろげるヤクシソウ秋深む野をにぎやかにして (鳥海 昭子) ※ヤクシソウの花言葉は「にぎやか」

分布: 全国(北海道南部以南)

### ウツギ (アジサイ科)

ドイツア クレナータ  
学名: *Deutzia crenata*

空木 別名: 卯の花(ウノハナ), 雪見草

#### 主な生育場所

里山の日当たりのよい林縁や路傍, 崖地などに生える。溪流沿いなど川辺にも多い。また, 人家の庭先や生け垣, 所有する畑や水田の境界部に目印用に植栽することもある。

#### 特徴

樹高1~3mほどで株立ちする低木。葉は対生し, 若枝は赤褐色で星状毛がある。縁に微細な鋸歯があり長さ4~9cm, 幅2.5~3.5cmほどの楕円形~卵状披針形の葉は対生する。葉の両面や葉柄にはやや密に星状毛をしく。5~7月に枝先に下向きに白色の花を多数つける。花後, 椀形で花柱が残った果実をつけ, 晩秋に熟す。



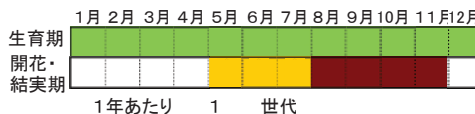
開花期にも前年度の果実が残る

名前の由来: 幹や枝を折ると, 中空であることから空(うつろ)なる木ということでウツギ(空木)。また卯の月(旧暦の4月)に咲くことから卯木とされたともいう。

#### <農業との関係>

里山によく見られる清楚な白いウツギの花は邪気を払うと考えられ, 生け垣や畑の境界などに植えられてきた。また, 開花期が田植えの時期にあたるため, 今でも東北地方を中心に水田の水口に花のついたウツギの枝を差し, イネに邪気が宿らないように祈る風習が残る。たくさんの枝を水口に差し, 枝先に密生して咲くウツギの花をたわに稔るイネの穂に見立てて豊作を願ったともされる。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



花弁は5枚。花弁よりやや短い雄しべが10本ある

<類似種> 関東地方以西には4月ごろから咲き始め, 小振りな花がつくヒメウツギが河川沿いの崖地などに見られる。またやや標高の高い山地に育つマルバウツギの葉は卵形で丸い。バイカウツギの花はウツギより大きく芳香があり, 花弁は4枚。

#### <一言うち>

中空の幹をもつ低木は「ウツギ」と呼ばれることが多く, 今回取り上げたアジサイ科のウツギの他に, 淡紅色~赤色の花をつけるスイカズラ科のタニウツギや, 小降りの花のバラ科のコゴメウツギ, また有毒植物のドクウツギなど多数あり, いずれも里山に身近な植物となっています。



梅雨時の林縁を彩るウツギ

#### <人との関わり合い>

初夏に咲く清楚な卯の花は, 万葉歌人の大伴家持が好んで詠んだように, 古来からよく知られ, 詩歌にもよく取り上げられてきた。同じ初夏の季語であるホトギスとともに詠われることも多い。唱歌「夏は来ぬ」の冒頭にも「卯の花の匂う垣根に」と取り上げられている。また, 関東地方などでは豆腐の絞りかすである「おから」を「から(空)」を連想し縁起が悪いとし, 「おから」と同様に白く, 小さな花をたくさんつけるウツギの花に喩え「卯の花」と呼ぶ。ただし, ウツギ自体は食材として適さない。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語: 初夏】 卯の花の過ぎば惜しみか霍公鳥雨間も置かずこゆ鳴きわたる (大伴家持)  
なく声をえやは忍ばぬほととぎす初卯の花の影にかくれて (柿本人麻呂)  
卯の花をかざしに関の晴着かな (河合會良) 卯の花や神と乞食の中に咲 (小林一茶)  
卯の花のこぼる露の広葉かな (与謝蕪村) 卯の花は日をもちながら曇りけり (加賀千代女)

分布: 全国

### イチョウウキゴケ ウキゴケ 科

リシオカルポス ナタンス  
学名: *Ricciocarpos natans*

銀杏浮き苔 別名: イチョウウキクサ, イチヨウモ, ムラサキイチョウゴケ

#### 主な生育場所

水田やため池, 流れの穏やかな水路など。水面を浮遊するため, 流れのある河川ではワンドなど水がよどんでいるような場所で見られることもある。また, 湿地などの泥上では陸生形でも生育できる。

#### 特徴

水面を浮遊する苔類。多年草で肉厚の葉状体をもつ。春先から晩秋にかけて赤みを帯びた緑色で長さ10mm幅5mmほどの肉厚で扇形の葉状体を分裂し増殖する。裏側には紫色の鱗片を根状に伸ばす。水田では湛水期間中に葉状体中央部に胞子体形成する。落水以降, 葉状体裏側から仮根を下ろし, 陸生形で越冬する。

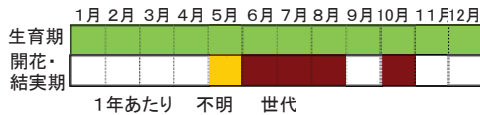


名前の由来: 水面を浮遊するコケで, 葉状体(葉のように見える部分)が扇形に広がり表面には葉脈のような浅いしわができることから, 銀杏(いちご)の葉に見立て銀杏浮き苔。

#### <農業との関係>

冬期でも冠水したり, 土壌が乾きにくい湿田, 半湿田に多く見られたが, 乾田化や除草剤の影響等により, 一時ほとんど見られないほど減少し, 絶滅危惧I類に指定されていた。しかし, 最近では無農薬水田以外でも各地で見られる機会が増えてきており, 2007年度版のレッドリストでは準絶滅危惧に格下げされた。しかし, まったく見られない地域もあり, その原因はいまだ不明である。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



中干しによる落水期に着土したイチョウウキゴケ

<類似種> 同じウキゴケ科に属するウキゴケ(カツノゴケ)は, 水面ではなく水中を浮遊する。また葉状体は白緑色で厚みはなく, 二股に分枝する。ハタケゴケはよく似た肉厚の葉状体をもつが, 規則的に二股分岐して円形ロゼット状となる。

#### <一言うち>

イチョウウキゴケは日本で唯一の水面を浮遊するコケですが, かつてはどの水田でも見られた普通の水田雑草でした。しかし, いつの間にか各地で姿を消し, 一時はその実態が謎わしい(虚仮)ほど少なくなりました。最近, 復活傾向にありますが, 決してこけおどしとなりませぬように。



ウキクサと混生

#### <人との関わり合い>

食用や薬用としての利用の記録は見当たらない。しかし, イチョウウキゴケは除草剤に対して感受性が高いと考えられることから, 最近, 水生植物に対する農業の影響評価用の材料としての検討も始まっているようである(FAMIC広報誌No.54 2018年秋号より)。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語: 不明】

「苔(こけ)」は, 「苔青し」「苔茂る」「苔の花」(いずれも夏の季語)のように俳句や短歌などにはよく取り上げられる題材だが, かつては水田でよく見られた水面を浮遊する唯一の苔であるイチョウウキゴケに関しては誰も関心がなかったようである。田んぼの観察会では見かけることも多くなったので, もっと注目されてもよい水草の一つといえよう。

分布: 全国

### フユノハナワラビ (ハナヤスリ科)

ボトリチウム ムルチフィドゥム ロブストゥム  
学名: *Botrychium multifidum* var. *robustum*

冬の花蕨 別名: 冬蕨, 花蕨, 日陰蕨, カゲワラビ, トコワラビ, 霜蕨, 寒蕨

#### 主な生育場所

落葉樹林の林床, 田畑の畦畔, 土手, 山野の草地などに生育する。秋から冬にかけて日当たりの良い場所に見られる。

#### 特徴

夏に枯れる冬緑性のシダ植物。無毛で暗緑色, 3~4回羽状に深裂し, 長さ5~10cm, 幅8~12cmで革質の葉を9~10月に展開し, 基部近くで胞子葉を分岐する。胞子葉は高さ25cmほどとなり, 円錐状に球形の胞子嚢を多数付ける。晩秋から冬にかけて胞子散布後, 胞子嚢は枯れ落ちる。胞子の外膜はほぼ平滑で胞子表面は網状。

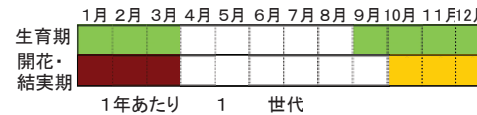


名前の由来: 夏には見られず, 秋から冬かけてワラビに似た栄養葉を展開し, 高く伸びた胞子葉は円錐状にたくさんの胞子をつけ, まるで花のように見えたことから, 「冬の花蕨」と称された。

#### <農業との関係>

草生管理で秋から春にかけて刈り取りを行わない果樹園下などで見られることはあるが, 耕地内では見かけることは少なく, 農業上の被害をもたらすことはない。耕地周辺の利用地では芝地やゴルフ場のラフなどに生えることがあるが, 春には枯れてしまうため, ほとんど問題とならない。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)

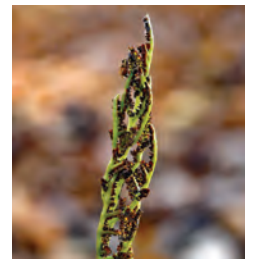


3出し3~4回羽状に深裂し, 5角形となる栄養葉

<類似種> ナツノハナワラビは, 春に芽生えて夏にかけて胞子葉を伸ばし, 秋には枯れてしまう。オオハナワラビは全体大柄で葉の先が尖り, 茎には毛がある。標高の高い山地にはよく似たヤマハナワラビが見られるが, 茎にまばらに短毛がでる。

#### <一言うち>

冬緑性の植物で, 春早くには葉が枯れ, 夏前にすっかり姿を消してしまいます。そして, 秋風が吹き出す頃に再び葉を出し始め, 本々が葉を落とすとどどとした葉と黄金色の胞子葉が目立つようになることから, 花言葉は「再生」や「再出芽」。来年の秋も無事を姿が見られるといいですね。



淡褐色の胞子嚢は日に当たると金色に輝いて見える。

#### <人との関わり合い>

他の植物が枯れる頃, 青々とした葉を地上に広げ, 胞子葉が天に向かって伸びていく様子が好まれ, 鉢植えや盆栽などに仕立てて観賞する愛好家も多い。食用にもなり, 晩秋から初冬にきれいな若芽や若葉を摘み取り, 姿揚げや鍋物に, さつと茹でて酢味噌などにするとめりめりが楽しめる。しかし, 同じシダ植物でもワラビとは異なる仲間なので, 食感, 味などは全く異なる。また, 生薬では陰地蕨(いんちけつ)と呼ばれ, 全草を刈り取って干し, 煎じたものを服用すると腹痛や下痢に効くとされる。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語: 冬】

ことごとくユダヤの土上冬蕨 (齋藤 玄) 冬蕨「樹下の石仏」我と逢ふ (森 澄雄)  
夢見るが夢見しあと冬蕨 (青柳志解樹) 冬蕨日に反るや日を抱けるや (宮坂静生)  
風韻の人おもふべし冬蕨 (飴山 實)

分布: 全国

## オオジシバリ (キク科)

イクセリス ヤボニカ  
学名: *Ixeris japonica*

大地縛り 別名: ツルニガナ(蔓苦菜), ジシバリ, 這い地縛り, 岩ニガナ

### 主な生育場所

田や畑の畦畔, 休耕地, 路傍, 草地, 樹園地, 土手, 原野などに生える。日当たりが良く, やや湿った場所を好む。最もよく見られるのは水田の畦畔で, 伝統的な畦の植生を代表する草花の一つ。

### 特徴

多年生。根出葉を放射状に広げ, 細い茎を地表あるいは浅い地中に長く四方に伸ばす。茎の節から葉や根を下ろし, 長い柄の葉は互生し浅くまばらな鋸歯がある。葉や茎の切り口から出る白い乳液は苦い。葉脇から伸びる花茎は高さ20cmほどでタンポポに似た径約3cmの頭花を2~3つける。皮針形のそう果は長い冠毛をもつ。

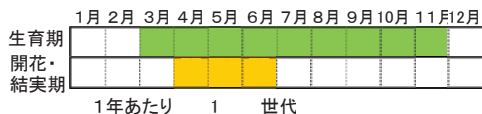


名前の由来: 細長いほふく茎で地面を這って広がっていく様子が, まるで地面を縛っているようとして地縛り。類似の地縛り(イワニガナ)より花や葉がが大きくなることから, 大地縛り。

### <農業との関係>

成長点が低い位置にあるため, 草刈りに強く, また被陰には弱いため, 刈り払い機などで適切に管理されている水田畦畔で多くなる。除草剤を多用する畦や基盤整備直後に造成された畦畔では見かけることが少なく, 伝統的な畦草刈りによる管理の指標となる。耕起には弱いため, 水田や畑地内に入ることはほとんどないが, 耕起管理が少ない樹園地などではやっかいな雑草となることがある。

### <生活史> 関東地方の例(目安)



花後にタンポポに似た冠毛をもつ種子をつける。

<類似種> タンポポ類は匍匐茎を伸ばさず, 花茎につく花は一つ。やや乾いた場所にも生えるイワニガナはオオジシバリ同様に地面を這って四方に広がるが, 全体小型で葉は広卵形, 花の大きさは径2~2.5cmほど。

### <一言うちく>

オオジシバリは春から初夏にかけて花数が多く, ミツバチなどの蜜源としても貢献しています。しかし, かつては各地の水田の畦にありふれた花でしたが, コンクリート畦の増加や除草剤による管理が増えたため, 最近ではほとんど見かけることが少なくなってしまった地域もあるようです。



花は舌状花のみからなり, 中央に黒っぽい雄しべがよく目立つ。

### <人との関わり合い>

全体に苦みがあるが, 若葉は「苦み菜」として食べることができる。開花期に全草を採取し, よく洗った後に日干したものは生薬名で剪刀股(せんとうこ)と呼ばれ, 健胃, 消炎, 解熱に効能がある。健胃薬としては, センブリの代用となる。また, 蓄膿症にも効果があるとされる。

### <俳句や短歌への登場>

【季語: 設定なし】

春から夏にかけて水田まわりでよく見かける花にかかわらず, 意外だが, 季語の設定もなく, これまで短歌や俳句に登場することはなかったようである。

分布: 全国

## ゲンゲ (マメ科)

アストラガルス シニクス  
学名: *Astragalus sinicus*

蓮華 別名: レンゲ, レンゲソウ, テンマリソウ, ゲゲバナ, ミコシソウ, 紫雲英, 翹揺

### 主な生育場所

耕作前の水田, 休耕地, 田畑の畦畔, 法面草地, 河川敷など。湿った場所を好むが, 長時間冠水するような湿地には生えない。また日陰でも生育できるが, 日の当たる場所で大きな群落となる。

### 特徴

下部は地面を這い, 上部は斜上し10~25cmの高さとなる越年草。茎の断面は四角形で柔らかく, 有毛で根元からよく分枝する。葉は互生し, 9~11枚の小葉からなる奇数羽状複葉で小葉は倒卵形で円頭あるいは凹頭。10~20cmの花柄の先に紅紫色の蝶形花を輪状につける。果実は黒熟し, 長さ2~3cm。種子は勾玉形で茶系色。

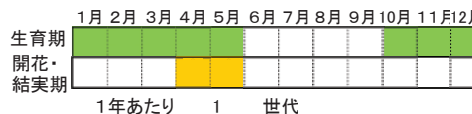


名前の由来: ゲンゲとは漢名の「翹揺」の音読みによる。また, 春先に伸ばした花茎の先につける7~10個の輪状の花の様子を仏様が乗る「蓮華」(ハスの花)の座に見立てて, レンゲ。

### <農業との関係>

古来から緑肥や飼料として各地で栽培されてきた。とくに化学肥料が登場するまでは, 窒素固定能が高い根粒菌をよくつけ, 毎年自生するゲンゲは水稲休閑中に土壌を肥やすことのできる優秀な緑肥であり, 10aあたり5kg以上の窒素を供給することができた。しかし, 化学肥料の普及や田植えの早期化による生育盛期や結実期前の耕うんにより, 急速に春の水田から姿を消していった。

### <生活史> 関東地方の例(目安)



水田に緑肥として栽培されるゲンゲの開花期

<類似種> 春の水田で似たような植物は見当たらない。同じ豆科のヤハズエンドウ(カラスノエンドウ)も羽状複葉だが, 小葉の幅は狭く, 小葉数もゲンゲより多く, 偶数枚となる。また蝶形花を同じように頭状につけるシロツメクサの花の色は白い。

### <一言うちく>

ゲンゲは, 日本在来の草花ではなく, 奈良時代頃に中国から緑肥や飼料用に導入された帰化植物です。その後, 春の水田の風物詩となるほど日本の風土に馴染み, 和歌や俳句などにも多く詠われています。しかし, 緑肥や飼料用のゲンゲ種子の生産はいまだ中国で行われることも多いのです。



花茎の先に蝶形花7-10個を輪生

### <人との関わり合い>

緑肥や飼料用に栽培されるほか, ミツバチの良質な蜂蜜を提供する蜜源植物として養蜂家にもよく利用されている。また, 水稲不耕起栽培と組み合わせると, 水稲移植前後の雑草抑制にも利用されることも。各地の休耕地等に鑑賞用にも栽培される。若菜や花は食用となり, 花付きの茎を姿揚げにしたり, 花と蕾を酢を入れた熱湯にくぐらせ三杯酢で食べたりする。開花期に採取し天日乾燥したものは, 咳やのどの痛みなどに効くとされ, 民間ではうがい薬等にも使われることがある。

### <俳句や短歌への登場>

【季語: 春】 手に取るな やはり野に置け 蓮華草 (滝野 瓢水) 胸までの紫雲英仔犬は迷ひゆく(中村 草田男)  
野道行けばげんげんの東すてゝある(正岡 子規) げんげんを打ち起したる瘦田かな(正岡 子規)  
春の田はただたがやさずれんげさうあぜのさかひもあらず咲きたり (三ヶ島 葎子)  
赭土(あかつち)の山の日かげ田にげんげんの花咲く見れば春たけにけり (島本 赤彦)



分布：東西南部以南

### ウラボ

(ウラボ科)

裏白 別名：シダ(歯染)

学名: *Diplazium glaucum*

#### 主な生育場所

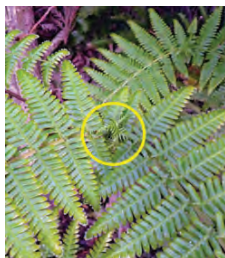
里山など主に低山地帯の林床などに生える。日当たりがよく乾き、貧栄養な場所を好む。疎林の林床や日の当たる斜面部でよく見られ、ときに大群落となる。山火事跡などにもよく見られる。

#### 特徴

固い葉柄は直立し、その先に一对の葉を約120度の角度で広げる。葉は羽状に2回深裂し、長さ30cm~1mほど。表面は緑色だが、裏面は粉白色。二枚の葉の間から次年度以降、新たに葉柄を伸ばして一对の葉つけ、毎年葉の段を重ねていく。7月はじめごろ、葉裏の裂片中央脈の両側に黄緑色のソーラス(胞子葉群)を並べる。



葉の裏はその名の通り白い



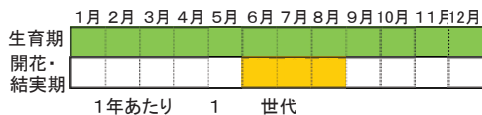
一对の葉の間から新たな一对の葉が展開

名前の由来：葉の表面は非常につやがある緑色だが、裏側は粉を吹いたように白いことから。また元来、「歯染(シダ)とはウラボを指す。

#### <農業との関係>

畑地や田内に生えることはないが、谷津田に接する山腹斜面に見られることがある。本州中部以西の里山ではよくみかけ、葉は1mと大きくなるので、野良仕事で一休みする際の敷物や、枯れ葉を焚き付け用に利用していたと思われる。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> コシダはウラボと同じような環境に生え、葉裏も白く、一对の葉を展開しながら成長する様子もよく似ているが、コシダの葉は15~40cm程度とウラボより小型。またウラボの葉は羽状に2回深裂するが、コシダは羽状に1回深裂のみ。

#### <一言うち>

ウラボが縁起物として重宝されるのは、葉裏の白さが、神様に対して裏表のない潔白で清廉な心を表しているからともされています。また花言葉は「無限に」。来年こそウラボにあやかって、心安らかに清い心持ちで平和な時間が続くことを願うばかりです。

#### <人との関わり合い>

毎年一对の葉を重ねていく様子や葉が垂れ下がる様子を「歯垂る(しだる)として長寿をイメージすること、また葉裏が白いことから代々白髪になるまで長生きするようにとの願いを込めて、古くから軒先の注連飾りやお供え餅のお飾りなどの縁起物として使われてきた。また、光沢のある葉柄は固く丈夫なため、編みカゴなどの材料としても利用される。

食用には適さないが、冬に地上部を採り、刻んで日干しにしたものは、利尿剤となる。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語：新年】 歯染(しだ)はウラボのこと。

餅を夢に折むず歯染の草枕 (松尾芭蕉)	新年の山深く歯染はみどりなる (室生犀星)
名こそかはれ江戸の裏白京の歯染 (正岡子規)	裏白に齢かさねし父と母 (百合山羽公)
裏白のうらまで年の光かな (川瀬巴水)	裏白や父が飾れば青まさり (中村汀女)

分布：全国

### キショウブ

(アヤメ科)

黄菖蒲 別名：イエローアイリス、ウォーターフラッグ

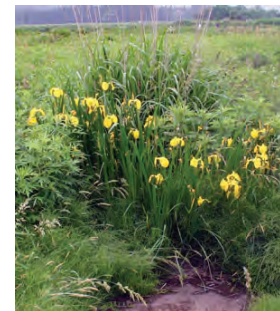
学名: *Iris pseudoacorus*

#### 主な生育場所

ため池や湖沼の岸辺、河川岸、水路、湿地など、水深が0~10cm程度の浅い水辺域を好む。湿った環境であれば畑地、林縁にも見られる。乾燥に注意すれば花壇や畑地で栽培することもできる。

#### 特徴

太い地下茎のある大型の多年草で、高さ1.2mほど。扁平な幅2~3cmの剣状の葉が二列に根生。両面に明瞭な中央脈が隆起する。花茎は少数の枝を分け、枝先に1~2個の鮮黄色の花をつける。花は大型で先が垂れる外花被片3枚、小型で直立した内花被片3枚からなる。果実は断面が三角形の長楕円形で中に扁平な種子が入る。

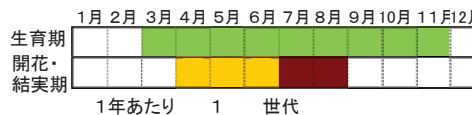


名前の由来：同様に湿地に生えるショウブ科のショウブ(菖蒲)の葉によく似て、黄色の花をつけることから黄菖蒲。ちなみにショウブ科のショウブの花は花弁がなく緑色の円柱花序となる。

#### <農業との関係>

水田や畑にも生えることがあるが、耕うんに弱い問題にはならない。しかし、ため池や水路では大群落を形成して、取水や通水障害を引き起こすことがある。花がきれいいため、池やビオトープなどにひとたび導入すると、地下茎だけでなく水に浮く種子による拡散により、あちこちに群落をつくり、吸肥力も強く、在来種を含む他の水辺植生を駆逐してしまうおそれがある。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



鮮やかな黄色の花。外花被片基部に斑紋が入る。



葉に隆起した中央脈がめだつ。

<類似種> 在来種のアヤメの仲間はずべて紫色の花を咲かせ、黄色の花をつけるものはない。また、ショウブ科のショウブの葉には独特の芳香がある。

#### <一言うち>

キショウブは日本に自生せず、明治30年に観賞用としてヨーロッパから持ち込まれた外来植物です。現在は全国に野生化し、繁殖力が強いので、水路やため池の強害雑草となったり生態系に大きな影響を与えています。きれいな花ですが、逃げ出しやすいため栽培することは避けましょう。

#### <人との関わり合い>

在来種のアヤメやカキソウタの栽培品種には青系や白系などが多く、黄色系の花がないため珍重され、観賞用として各地の水辺で導入されてきた経緯がある。庭池にもスイレンと並んで多く植えられてきたが、大繁殖し手に負えなくなるともしばしばある。また、景観を兼ねた水質浄化植物としてビオトープや水路に植えられることもあるが、水質浄化能力はそれほど高くない。

なお、全草に含まれるイリジンは摂取すると胃の障害を引き起こすおそれがあり、食用や薬用には不向きである。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語：夏】

黄菖蒲のをはりの花のをはりかな (山口青邨)	黄菖蒲が互様に咲ける曇かな (富安風生)
黄菖蒲の黄の映る水平らかに (池内たけし)	黄菖蒲の中洲が頰つ梓川 (白岩てい子)
黄菖蒲に躡む一人や裏の明けず (阿部みどり女)	黄菖蒲や魚板のかわく翁堂 (高井去私)

分布: 全国

### ヤブガラシ (ブドウ科)

カウラティア ヤボニカ  
学名: *Cayratia japonica*

藪枯らし 別名: 貧乏蔓(びんぼうかずら), 貧乏葛(びんぼうくず), ビンボウグサ

#### 主な生育場所

野原, 堤防, 林縁, 道ばた, 荒地, 庭先などの日当たりの良い場所を好む。ツルを伸ばすため, フェンスなどにも絡まりやすい。市街地にもよく見られる。樹園地やアゼなどに生育することも多い。

#### 特徴

ツル性で2~3mも伸びる多年生。茎は角張り, 節を中心に赤紫色を帯びる。小葉5枚からなる葉は互生する。小葉には低い鋸歯があり, 基部に托葉がある。夏に花柄を伸ばした先の集散花序に多数の緑黄色の小花をつける。小花の直径は5mmで, 花弁が落ちると黄赤色の花床が目立つ。地下茎は太く横に長く伸びる。

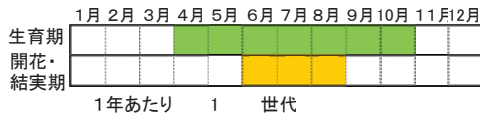


名前の由来: 繁殖力が非常に強く, 竹藪なども枯らすほど繁茂することから。また, 別名は庭の手入れどころではないような荒れ放題の貧乏の家でよく見られることから。

#### <農業との関係>

果樹園では, 繁殖力が旺盛で, 地下茎も深く長く伸びるために, いったん定着すると防除が難しい強害雑草となる。地下茎は耕起等によって断片化しても萌芽能力を有し, 切断された茎も土中に埋められると活着することがある。種子からも簡単に発芽するので, 農地では, いったん侵入・定着をみたら, 花を付ける前に丹念に抜き取るか, 除草剤によって地上部を枯らすなどが重要である。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> ウリ科のアマチャヅルも5枚の小葉からなるが, 小葉はヤブガラシよりも柔らかく, 幅も狭い。また, 茎はヤブガラシのように茎は赤紫色を帯びることがない。

#### <一言うち>

庭先にヤブガラシが繁茂すると貧乏につながらるともされ, まるで貧乏神のような言い草ですが, 若葉は食べることができ, また根も生薬となるほか, 茎や花を墨と一緒にすりつぶすと墨色が濃くなるなど, いろいろと役に立つ器用貧乏な一面も持っているのが, このヤブガラシです。

#### <人と関わり合い>

ツル性で庭先などを覆い尽くすため, 古来からカナムグラと並んで, 手入れが行き届かない荒地果てた風情を醸し出す草として扱われてきた。若芽や柔らかい茎先は, 天ぷらのほか, よく茹でてアクを抜き, 水にさらせば, 辛みがアクセントとなる和え物などに利用できる。また, 根を乾燥させたものは烏斂母(ウレンボ)と呼ばれる生薬で, 利尿や鎮痛, 解毒効果があるとされる。生の葉をすりつぶした汁は腫れ物や虫刺されに効くという。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語: 初秋】

あるといふところにありし藪枯 (星野 立子)	月出でて蔓先潤ふ藪がらし (岸田 稚魚)
藪からしも枯れてゆく時みやびやか (細見 綾子)	血縁に百姓の妻藪がらし (百合山 羽公)
外濠を埋めたつむりの藪がらし (鷹羽 狩行)	学ぶヒマラヤンダへ藪がらし (中村草田男)

分布: 関東地方以南

### コセンダングサ (キク科)

ビデンス ピローサ ピローサ  
学名: *Bidens pilosa* var. *pilosa*

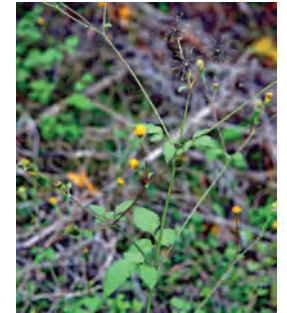
小梅檀草 別名: ひつつきむし, 三葉鬼針草

#### 主な生育場所

路傍, 田や畑の畦畔, 畑地, 牧草地, 芝地, 荒地や空き地, 野原, 河原などに普通にみられる。日の当たるやや乾いた場所によく群生するが, 適応性が高く日陰の湿地環境でも生育できる。

#### 特徴

江戸時代に伝播した熱帯アメリカ原産の一年草。細かい毛が生え, 断面が4~6角形の茎は直立し, 高さ約0.5~1m。3~5枚からなる複葉は下部で対生, 上部で互生し, 丸みを帯びた鋸歯がある。茎上部の枝先に, 黄色の筒状花だけからなる頭状花をつける。果実はやや平たく4稜形。下向きのとげを並べた3~4本の芒がある。

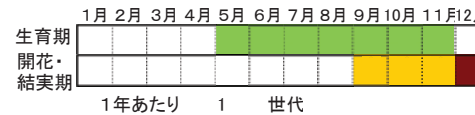


名前の由来: 樹木の梅檀(センダン)の葉に似ていることからセンダングサ。また類似種のセンダングサに比べ, 花弁のない花が小さく見え, また葉も丸みを帯びることから小(コ)センダングサ。

#### <農業との関係>

農地周辺に普通にある雑草で, 同属で湿地を好むアメリカセンダングサと異なり水田に入ることはないものの, 畑地や果樹園で群生し, 作物との水分・養分競合や収穫作業の障害を引き起こし強害雑草となることがある。コセンダングサの仲間は, 衣服等にくっつきやすい果実が農作業に伴って農地に拡散されるので, その多くの種類が世界の暖帯から熱帯の農地で問題雑草となっている。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



黄色の筒状花からなる頭状花(右)と果実(左)

<類似種> 湿地に生えるアメリカセンダングサの茎は赤みを帯び, 頭状花の総苞片が目立ち, 果実には2本の芒。似た環境に生育するセンダングサの頭状花には1~5枚の舌状花があり, 小葉に不規則な切れ込みが出やすい。

#### <一言うち>

世界の温帯~熱帯に広く分布するコスモポリタンなコセンダングサは, 種内変異も大きく, 日本でも頭状花に白い舌状花があるシロバナセンダングサや白色の舌状花が1cm以上の大輪となるアウキセンダングサなどの分布が知られ, 沖縄県ではサトウキビ畑の大変な問題雑草となっています。



白色の舌状花が目立つ変種アウキセンダングサ

#### <人と関わり合い>

果実は「ひつつきむし」として, 服などにくっつくとなかなか取れないが, アメリカセンダングサと比較すると, 芒(のぎ)の数は3~4本多い(アメリカセンダングサは2本)ものの, 果実は細長い四角柱でつまみやすく, 扁平なアメリカセンダングサの果実よりは衣服からはがしやすい気がする。

#### <俳句や短歌への登場>

センダングサの仲間は, 「ひつつきむし」として昔から晩秋の野辺を代表する植物だが, 残念ながら季語への登録はないようである。また草種名が6文字で語呂が良くないためか, 俳句や短歌に詠われた例を知らない。

分布：北海道を除く全国

### ツルマメ (マメ科)

グリシナ マックス ソヤ  
学名: *Glycine max* subsp. *soja*

蔓豆 別名：ノマメ、クズカツラノハエ(久須加都良乃波衣)

#### 主な生育場所

水田や畑の畦畔、路傍、野原、堤防法面などに生える。河原の高水敷や水路沿いなどやや湿った水辺の近く日当たりのよい場所によくみられる。ツル植物なので、フェンスなどに巻き付くとよく伸びる。

#### 特徴

一年生つる性植物で下向きに粗い毛の生えた茎は細く長く伸び他に巻き付く。長い柄がある葉は互生し、両面とも伏毛を密生する狭卵形～披針形の3小葉からなる。8～9月に葉腋から花柄を伸ばし長さ5～8mmで紅紫色の蝶形花を3～7個つける。まれに白花もある。豆果は長さ2～3cmで、淡褐色の毛を密生し2～3種子を入れる。



名前の由来 茎はツルになって伸び、大豆のようなサヤをつけることから、ツルマメ。別名のノマメ(野豆)は大豆に似ていて野原に生えることから。クズカツラ(葛蔓)もマメ科のツル植物を表す。

#### <農業との関係>

野辺に生えるツルマメを品種改良したものが、栽培種の大豆となったとされる。そのため、ごくまれに大豆と交雑することが知られ、その雑種はツル化した。熟すとサヤがはじけるなどツルマメ由来の不良形質が発現することが多く、大豆畑の周辺では大豆の品質低下を防ぐため除草することが多い。また、畦に見られることがあるが、ほ場内に生えて雑草化することは少ない。



小葉は長さ2.5～8cm、幅1～3cmの狭い楕円形

#### <生活史> 関東地方の例(目安)

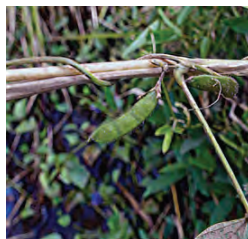


#### <類似種>

混生もするヤブマメの葉は丸みを帯び、花はツルマメの倍以上の大きさで開花時期もやや遅い。やや乾いた草地や林縁などに生育するヤブツルアズキやノササゲの花は黄色。ヤブツルアズキの葉は軽く3裂し、ノササゲは毛が少ない。

#### <一言うちく>

大豆の原種なので、花や豆果は大豆にそっくりです。縄文時代前期の三内丸山遺跡などからはツルマメと考えられるマメが出土しており、日本でも大豆の栽培が伝播する以前には食用として利用されていたようです。種子には大豆と同様にイソフラボンなどポリフェノールも含まれています。



サヤに褐色の毛を密生する豆果

#### <人との関わり合い>

種子は大豆と同様に食べることができるが、サイズが小さく熟すとサヤからはじけやすいので、大量に集めることが難しい。固くなる前の柔らかいサヤを集めて茹でると枝豆のように食べられるが大豆ほどの味はなくそっけない。また、大豆は食用だけでなく、サポニンやポリフェノールなどが多く含まれるため、その煮汁は女性の産後の回復促進、食中毒、多くの胃腸病に効果があるとされるが、ツルマメは大豆ほど機能性成分の含量は少なく、効果を有するほどでない。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語：不明】大豆の原種で野辺に普通にみられるツルマメですが、これまで詩歌に詠まれたことはないようです。栽培種の「大豆」は秋の季語で、収穫やその後の作業風景を「大豆ひく」「大豆干す」などとした季語もあります。

豊棚の稲も大豆も色づきて(高野 素十) 豆引も足駄でおはす御僧哉(会津 八一)

分布：全国

### アメリカアゼナ (ゴマノハグサ科)

リンデルニア ドゥビア メジャー  
学名: *Lindernia dubia* subsp. *major*

亜米利加哇葉 別名：アキボコリ、ハエドマリ

#### 主な生育場所

水田内や畦畔、休耕田や耕作放棄地、湿地、湿った畑にも生えることがある。人の手が加わっている、もしくはかつて加えられた湿地に見られ、開発を受けたことのない湿地には侵入していない。

#### 特徴

北米原産の一年生の帰化植物。基部付近でよく分枝し、直立または斜上する。無毛で高さ10～30cm。葉の表面はしばしば赤みを帯び、縁に低い鋸歯があり、表裏とも5本(まれに3本)の葉脈が目立つ。夏に葉腋から葉の長さより短いか同等の花柄を伸ばし、唇型で8～10mmの淡紫もしくは白色の花をつける。果実は狭楕円形。



名前の由来：在来種のアゼナの仲間、北アメリカからの帰化植物なのでアメリカアゼナ。

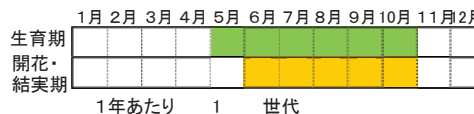
#### <農業との関係>

アゼナ類は水田でよく見かける雑草だが、大発生することがない限り、害草とはなりにくい。しかし、アメリカアゼナをはじめとするアゼナ類は、水田で使われる除草剤のうち、スルホニルウレア系の成分に対し抵抗性を示すタイプが出現し、各地で問題となった。除草剤に対する耐性を有する雑草が増えたため、最近では非スルホニルウレア系の成分も配合した除草剤が主流となりつつある。



基部は細まり、5本の葉脈が目立ち鋸歯のある葉。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



#### <類似種>

在来種のアゼナの葉には鋸歯がなく、3本の葉脈が目立つ。同じく北米原産でアメリカアゼナの1タイプであるタケアゼナの鋸歯は不明瞭で、葉の基部が丸く卵形。ヒメアメリカアゼナの葉は長さ約15mmと小さく花柄が葉の2～3倍と長い。

#### <一言うちく>

畑地ほどではありませんが、水田内にも近年、アメリカアゼナをはじめ、アメリカコナギ、アメリカセンダングサ、アメリカタカサブロウ、アメリカミズキンバイ(ヒレタゴボウ)、アメリカミソハギなど、北アメリカや欧州原産の帰化雑草が増えてきており、「改米か！」が進んでいます。



葉の基部が丸くなるタケアゼナ

#### <人との関わり合い>

アメリカアゼナがいつ頃から帰化したのかは不明だが、戦後、西日本を中心に各地に広まった。新しい帰化植物ではあるが、いまや水田では、タケアゼナとともに在来種のアゼナに置き換わって見かけることが多くなってきている。また、アゼナ類は水田の主要な雑草の一つであるが、食用や薬用の記録はない。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語：不明】

アメリカアゼナを含めたアゼナ類の花はよく見ると可憐ではかなげな美しさがあると思うのだが、これまで詩歌などに登場したことは寡聞にして知らない。よく見る「ただの田の草」の一つであるが、除草剤耐性タイプの出現によって、初めてその名を広く知られるようになったとは、残念なことである。

分布: 全国

### ツルボ (キジカクシ科)

バルナルディア ヤボニカ  
学名: *Barnardia japonica*

蔓 穂 別名: ツルボウ, スルボ, サンダイガサ(参内傘), スミラ

#### 主な生育場所

田畑の畦畔, 畑, 樹園地, 山野, 路傍, 堤防, 河原など日当たりの良い草地に見られる。沿海部の崖部にも生育する。公園内や人家の庭先の芝生内にも見られることがある。墓地に咲くことも多い。

#### 特徴

主に鱗茎で増殖する多年草。鱗茎は黒褐色で2~3cmほどの卵球状。線形で長さ10~25cm, 表面が浅くぼんだ無毛の葉は春と秋の2回出る。春に出る葉は5花茎が伸びる前に枯れる。8~9月に20~40cm程度伸ばした花茎の先に径7mmほどの淡紅紫色, 稀に白色の多数の小花を総状につける。花披片は6枚で6本の雄しべは長い。

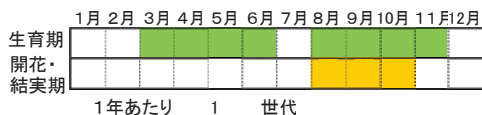


名前の由来: はっきりしないが, 群生し穂が連なって咲く様子から, 連穂(つれぼ)が転化したとも。別名の参内傘は, 公家が宮中に参上する際に使った柄の長い傘の閉じた様子の連想から。

#### <農業との関係>

鱗片や種子で増殖し, 芝地や牧草地, 果樹園で害草となることがあるが, 盛夏には葉がいったん枯れてしまうので, 気になることは少ない。畦畔などに群生すると花期にはそれなりにきれいであるため, 意識して刈り残す場合も多い。春と秋の新葉が出る前に草刈りを終えると毎年花を楽しむことができる。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 海岸部には全体がより大型で葉の幅も10~20mmと広い変種のハマツルボがみられる。ヤブランは林床など日陰に生え, 葉の枚数は多く, 葉色も濃い。

#### <一言うんちく>

ツルボもヤブランもかつてはユリ科に属していましたが, DNAの塩基配列情報に基づく最新の分類体系では, アスバラガスなどを含むキジカクシ科に移ってしまいました。新たな分類体系下で旧来のユリ科は大きく解体され, キジカクシ科やヒガンバナ科など8つに分かれてしまいました。

#### <人との関わり合い>

ツルボの鱗茎にはデンプンが多く含まれ, 外皮を向けば食料となるため, かつては飢饉時の救荒植物として利用されてきた。小さな鱗茎は皮をむいてそのまま食べることができ, 大きなものは割って, 塩を入れた熱湯でよく茹でた後, 塩や砂糖で味付けして食べる。花や葉も茹でて, サラダにしたり, 炒めて食べる。また, 鱗茎をすり下ろしたものをガーゼに塗布して湿布とすれば, 腰痛や打撲傷, 腫れ物の吸い出し, 初期の乳腺炎などに効果がある。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語: 初秋】 ※同じごろに咲く彼岸花と比べて, 少々地味なせいか, 詩歌に取り上げられることは少ないようだ。

くさはらの中よりひとり背のびするツルボむらさき来ている秋 (鳥海昭子)

分布: 全国

### ヤナギタデ (タデ科)

ベルシカリア ヒドロピペル  
学名: *Persicaria hydropiper*

柳 蓼 別名: マタデ, ホンタデ

#### 主な生育場所

水田, 畦畔, 休耕地, 水路わき, 川辺, ため池, 湿地など, 水辺に生育する。転換畑など水田跡の湿っぽい環境下だけでなく, 発芽時に潤湿であれば生育期には乾くような畑地にもみられる。

#### 特徴

高さ40~60cmほどになる一年生。根本は地面を這い, やや太くなる節から根を下ろし斜上する。短い葉柄で互生しほとんど無毛の葉の葉鞘には1~5mmの縁毛がある。夏から秋にかけて, 茎や枝先に淡緑色か淡紅色の花をまばらな穂状につける。腺点の多い花被に包まれた濃褐色で3稜またはレンズ形の種子には光沢がない。

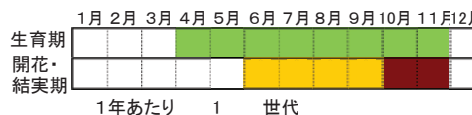


名前の由来: タデの仲間の中でも葉が披針形で, 同じように湿地に生えるヤナギ類の葉に似ていることから, 柳蓼。

#### <農業との関係>

全国の水田に普通に見られる雑草であるが, 大発生しない限り水稲と競合するようなことは少ない。しかし, 西南暖地では, 通常は夏緑一年生のヤナギタデの株が越冬して残り問題化することもある。霜が降りない地域でヤナギタデが多発生する場合には, イネ収穫後に早めに秋耕することも重要。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 同様の湿地環境に生育するポントクダの葉の脈や縁には伏毛が生え, 表面に八の字型の斑が目立つ。また, イヌタデの葉鞘の縁毛は長く, 花穂には密に花をつける。類似種と最も異なる点は, ヤナギタデの葉のみ辛みがあること。

#### <一言うんちく>

ことわざ「粟食う虫も好き好き」の粟とは, ヤナギタデのこと。辛味成分ポリゴジアルを含むため, 葉を噛むとピリリとしびれるほどで, ネパールでは魚毒として薬にも用いられるそうです。それにもかかわらずギンモンアカヨトウ(蛾)の幼虫などは好んでこの葉を食べるそうです。



花穂にはまばらに淡緑色の花をつける



葉鞘には1~5mm程度の縁毛

#### <人との関わり合い>

ヤナギタデの辛味は特有の香りを持ち, 変種ムラサキタデとして栽培されるなど, 薬味として昔から利用されてきた。芽生えた紅紫色の双葉を刺身の「つま」として利用したり, 葉をすりつぶしリンゴ酢に加えたものは「タデ酢」として鮎の塩焼きによく合う。味噌とみりんに加えると「タデ味噌」となり, 白身魚につけて焼くとおいしい。また, 辛味成分のポリゴジアルには, 抗菌効果, がん細胞の増殖抑制などが報告されている。また, ヨーロッパではヤナギタデの葉から黄色の染料をとっている。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語: 秋(蓼の花) ※水辺に生育する蓼類を含む。】 しのゝめや雲見えなくに蓼の雨 (与謝 蕪村)

蓼の葉や泥鰌隠るゝ薄濁り (正岡 子規) 刈りかけて去る村童や蓼の雨 (杉田 久女)

やほ蓼も川の瀬みればおいにけり辛しやわれも年をつみつ (曾禰 好忠)

からきにも馴るれば馴れて過ぐす世に蓼はむ虫を何かとがめむ (村田 春海)